【論　文】

造られた風景 ―布勢の「水海」の発見―

浅野則子

【要　旨】

大伴家持は越中守として赴任後、その土地の景を詠っているが、その中でも特に多く詠まれているのが「布勢の水海」である。家持はこの地に遊覧して詠うことを好んでいるが、その時に景としてどのような表現が必要であったのだろうか。家持の詠う「布勢の水海」の表現を歌う目的から考えていきたい。

【キーワード】

万葉集　大伴家持　歌の文化圏　越中　景

はじめに

家持は、越中守として赴任している間に、「布勢の水海」の歌を三回にわたり作っている。歌は以下のとおりである。

A　布勢の水海に遊覧せし賦一首

もののふの　八十伴の男の　思ふどち　心遣らむと　馬並めて　うてくちぶりの　白波の　荒磯に寄する　渋谿の　崎たもとほり　松田江の　長浜過ぎて　宇奈比川　清き瀬ごとに　鵜川立ち　か行きかく行き　見つれども　そこも飽かにと　布勢の海に　舟浮け据ゑて　沖辺漕ぎ　辺に漕ぎ見れば　渚には　あぢ群騒き　島廻には木末花咲き　ここばくも　見のさやけきか　玉くしげ　二上山に延ふつたの　行きは別れず　あり通ひ　いや年のはに　思ふどちかくし遊ばむ　今も見るごと

布勢の海の沖つ白波あり通ひいや年のはに見つつしのはむ

十七―三九九一・二

右は、守大伴宿祢家持の作りしものなり。　四月二十四日

B

（1）時に、明くる日将に布勢の水海に遊覧せむことを期り、仍ち懐ひを述べて各作りし歌

いかにある布勢の浦ぞもここだくに君が見せむと我を留むる

右一首は田辺史福麻呂

乎布の崎漕ぎたもとほりひねもすに見とも飽くべき浦にあらなくに

右一首は守大伴宿祢家持　十八―四〇三六・七

（2）

玉くしげいつしか明けむ布勢の海の浦を行きつつ玉も拾はむ

音のみに聞きて目に見ぬ布勢の浦を見ずは上らじ年は経ぬとも

布勢の浦を行きてし見てばももしきの大宮人に語り継ぎてむ

梅の花咲き散る園に我れ行かむ君が使を片待ちがてら

藤波の咲き行く見れば霍公鳥鳴くべき時に近づきにけり

右の五首は、田辺史福麻呂
明日の日の布勢の浦廻の藤波にけだし来鳴かず散らしてむかも
右の一首は、大伴宿祢家持の和せしものなり。
十八―四〇三八～四〇四三

（3）二十五日、布勢の水海に往く道中の、馬上に口号せし二首
浜辺より我が打ち行かば海辺より迎へも来ぬか海人の釣舟
沖辺より満ち来る潮のいや増しに我が思ふ君がみ船かもかれ
十八―四〇四四・五

（4）水海に至りて遊覧せし時に、各懐を述べて作りし歌
神さぶる垂姫の崎漕ぎめぐり見れども飽かずいかに我れせむ
右一首は、田辺史福麻呂
垂姫の浦を漕ぎつつ今日の日は楽しく遊べ言ひ継ぎにせむ
右一首は、遊行女婦土師
垂姫の浦を漕ぐ船梶間にも奈良の我家を忘れて思へや
右の一首は、大伴家持
おろかにそ我れは思ひし乎布の浦の荒磯のめぐり見れど飽かずけり
右の一首は、田辺史福麻呂
めづらしき君が来まさば鳴けと言ひし山ほととぎす何か来鳴かぬ
右の一首は、掾久米朝臣広縄
多祜の崎木の暗茂にほととぎす来鳴きとよめばはだ恋ひめやも
右の一首は、大伴宿祢家持
前の件の十五首の歌は、[1]二十五日に作りしものなり。
十八―四〇四六～四〇五一

C

（5）六日、布勢の水海に遊覧して作りし歌一首、短歌を并せた
思ふどち　ますらをのこの　木の暗　繁き思ひを　見明らめ　心遣らむと　布勢の海に　小舟つら並め　ま櫂掛け　い漕ぎめぐれば
乎布の浦に　霞たなびき　垂姫に　藤波咲て　浜清く　白波騒き
しくしくに　恋はまされど　今日のみに　飽き足らめやも　かくしこそ　いや年のはに　春花の　繁き盛りに　秋の葉の　もみたむ時に　あり通ひ　見つつ偲はめ　この布勢の海を
藤波の花の盛りにかくしこそ浦漕ぎ廻つつ年に偲はめ
十九―四一八七・八

（6）十二日、布勢の水海に遊覧して、多祜の湾に船泊りして、藤の花を望み見、各懐を述べて作りし歌四首
藤波の影なす海の底清み沈く石をも玉とそ我が見る
守大伴宿祢家持
多祜の浦の底さへにほふ藤波をかざして行かむ見ぬ人のため
次官内蔵忌寸縄麻呂
いささかに思ひて来しを多祜の浦に咲ける藤見て一夜経ぬべし
判官久米朝臣広縄
藤波を仮廬に作り浦廻する人とは知らに海人とか見らむ
久米朝臣継麻呂
十九―四一九九～四二〇二

Aは天平十九年四月、Bは天平二十年三月、C群は天平勝宝二年四月のものである。「布勢の水海」に行く途中のB（3）以外はそれぞれ「遊覧」[2]という題詞がつくが、「布勢の水海」についての表現は必ずしも同じとはいえない。従来はA群においては題詞にある「賦」について同時期に詠まれた、立山、二上山とともに「越中三賦」として、家持の赴任時期からみて、守という立場から越中の景観を漢詩の「賦」というとらえ方により作り上げた家持の文学意識を考えるものが多い。[3]また、田辺福麻呂を迎えての歌群は、歌人でもあった福麻呂との交流を中心に表現をみてきたといえよう。[4]確かに越中における家持にとって「布勢の水海」を詠うことは大きな意味があったことに他ならない。しかしながら、それぞれの歌の場において必ずしも歌の景として「布勢の水海」は同じ景観として表現されているだろうか。それぞれの歌の目的を考えつつ家持が越中という土地にある「布勢の水海」

を歌の表現として、どのようにとらえようとしたのかを考えることが目的である。

一

天平十九年四月二十四日と左注にあるAの長歌は「もののふの　八十伴の男の　思ふどち　心遣らむと」と歌い始める。ここからとらえられるのは、家持の官人意識である。守として赴任した家持は、「布勢の水海」へ官人として「思ふどち」とする仲間と出かけるのである。それは、都で官人たちが「秋風は涼しくなりぬ馬並めていざ野に行かな萩の花見に　十―二一〇三」というように郊外の景を見るために出かける表現と同様である。「大君のまけのまにま」[5]として越中に下った家持は、都の官人に他ならない。越中においても都と同じように官人は馬を並べて進んで行く。その地へ向かう目的は官人が心を「遣る」こと、気晴らしすることであった。「布勢の水海」の景は具体的に表現されてはいないものの、心を晴らす景であることは明らかである。さらにその地へ向かう様子は地名をつらねる道行きという方法をとる。この方法について橋本達雄氏は「『水』のテーマにふさわしい越中の名勝を、つぎつぎと道行きふうにあげてゆき、最後に布勢をもっともすぐれたものとして、たたえあげ手法である」とされる。[6]

しかしながら、目的地である「布勢の水海」の景は細やかに表現されていない。道行き的手法により、素晴らしい場所である目的地「布勢の水海」へ行くことが強調されるものの、その場所は水海として舟を漕ぐ表現としてのみ表れる。途中の具体的な表現は、「宇奈比川清き瀬ごとに鵜川立ち」であるが、これは景そのものではなく、翌年の春家持が出挙のために諸群を巡行した折に「時に当たり所に当たり、属目して作りしものなり」と左注があるもののうち「鵜を潜くる人を見て作りし歌」で「婦負川の速き瀬ごとに篝さし八十伴の男は鵜川立ちけり　十七―四〇二三」と詠うように、都の官人の視点でその土地における営みを景として詠っているものと同様に考えるべきであろう。都の官人の視点ということについては、この時期には実際に起こりえぬ景として「あじ群騒き」と表現することについて、鴨君足人が奈良遷都後に、藤原京における官人の風雅な様子を哀惜する歌に用いている表現であることから、都ではない自然の中での大宮人の姿を詠う意識があったとされる島田修三氏の論[8]があるが、この点は肯首されるべきであろう。

こうして実景としては異なっている都の景の表現を詠うことは、同行者と共通の美意識を確認することといえるのではないか。平舘英子氏はこの長歌は「布勢の水海」の船遊びへと誘うものであり、その場所にある鳥や花を「ここばくも見のさやけきか」とする地へといつも通っていきたいという願いが主眼であるため、景の讃美ではなく「思ふどち」として心を通い合わせている同行者への「日常的ではない相聞的情感」が目的であるとされる。[9]島田氏も同様に「大景の豊かな具体はほとんど描かれていない。むしろ大宮人の風雅なる交友への主情のみが、景を圧して強く打ち出されているといってもよい」とされる。[10]反歌において景は序詞としてのみ用いられることから考えても、このAの長歌、反歌は越中守としての家持の官人意識によってとらえられた「景」であり、実際に景勝地であったとしても、歌の世界においては、心を通い合わせた者同士が日常を離れた場として集う地としての位置づけをしたといえよう。

同時期に作られた他の賦には、題詞に「遊覧」という語句がないように、思うどちが集う姿は表現されていない。このように考える時、長歌が「思ふどち」と歌い始めたことが歌の目的を考える上で重要であるといえよう。「思ふどち」は、万葉集では官人によって次のように詠われる

①春日野の浅茅が上に思ふどち遊ぶ今日の日忘らえめやも　十―一八八〇
②春の野に心延べむと思ふどち来し今日の日は暮れずもあらぬか　十―一八八二
③梅の花今盛りなり思ふどちかざしにしてな今盛りなり　五―八二〇
④酒杯に梅の花浮かべ思ふどち飲みての後は散りぬともよし　八―一六五六

①・②は春の雑歌のなかで「野遊」と分類されるものであり、都における官人の交流において、景に対して同じ理解をもつ者を指すと考えてよいであろう。また③は大宰府での梅花の宴のもの、④は坂上郎女の宴席でのものとすると、これらの歌も同じ心情で集うという意味をこめていると考えられよう。それは具体的な場でなく、そこに集う者の心情に中心がおかれる。言い換えれば同じ思いで景を楽しもうとする都から赴任した官人家持にとってそれらの人は土地の住人ではなく、同じように都の景を見てきた官人にほかならない。「思ふどち」と歌い始められるこの歌群では都と同じように、官人たちが景を見ることが必要であったといってよい。[11]そのように詠うことで「布勢の水海」は、たとえ物理的に遠く鄙と呼ばれる地にあったとしても、都と関係のある場所、「遠の朝廷」の景として位置づけられるのではないか。それは、「大君の命かしこみ」として越中へと趣いた家持の官人としての意識として考えられるであろう。心が通い合う者同士が楽しく「遊覧」することを詠うことが目的であるため、そこでは景そのものは重要ではなく、「思ふどち」が日常を離れた景勝地においてどのように過ごすかが問題となる。平舘氏が「相聞的情感」とされるように、[12]この歌においては景は官人たちの心を満たすものとしてのみ表現されればよく、実態としてそれが都とは異なった景勝地であったとしても景としての表現は求められてはいなかったというべきであろう。

家持が守として赴任してまだ時期が浅い頃に「越中三賦」として、立山・二上山の賦と同じ時期に作られたものではあるが、[13]「景」として表現を考えた場合、この「布勢の水海」の賦のみが「遊覧」という題詞をもつことの意味が明らかになったと思われる。あくまで都の官人の自然観により官人たちが都の郊外と同じようにとらえた景勝地というものがこの時期における「布勢の水海」なのである。

二

次にB群とした福麻呂を迎えた時の「布勢の水海」の表現を考えていきたい。これらの前にある歌の題詞によれば、天平二十年三月二十三日に橘諸兄が使わした田辺福麻呂をもてなそうとした折の歌である。都を離れている家持にとって、最も信頼していた橘諸兄からの使者は、諸兄とのつながりを感じてうれしく思うとともに、丁重に扱わねばならなかったはずである。ここで、家持は饗宴のみでなく「遊覧」という形でもてなしている。その折の歌が「布勢の水海」への遊覧とされる。歌は出かける前と途中、現地でのものと三回にわけて詠われる。都から来た人に見せるということは、ここでも共通認識としての「景」を考えることが必要であろう。[14]

まず、「布勢の水海」へ行く前、景を見せるということで福麻呂と家持が歌を交わすが、ここでは都からやってきた人は「いかにある」と詠いその景について、まだ認識がなされていないことがわかる。それに対して家持は「ひねもすに見とも飽くべき浦にあらなくに」という表現により、具体的ではないものの、都の官人が心惹かれる景であることを詠う。この家持の表現の基にあるのは、やはり都の官人としての共通の景における認識と考えてよいであろう。

次の（2）も（1）同様にまだ「布勢の水海」の景を福麻呂は見て

いないが、題詞に「布勢の水海に遊覧せむと期り」とあるように、より遊覧する景が具体的に想像されているといえよう。そこでは、福麻呂は家持の勧める景観を都での共通の歌世界から思って詠う。それは官人たちが水辺にでかけた折にみやげものとして「玉を拾う」場であり、都の他の官人は見たことがない景として伝えるにふさわしいであろうと詠うのである。この歌群において四首目には季節としてふさわしくない「梅の花咲き散る園」という表現がある。この歌は、万葉集中に「梅の花咲き散る園に我行かむ君が使いを片待ちがてり　十―一九〇〇」という作者未詳の歌があり、五句以外は同じ表現であるため、古歌として詠われたとするのが一般である。[15]「梅の花の園」という古歌を福麻呂が提示することについては、「園」という「布勢の水海」の辺の地名に関しての興味ということが定説となっている。「園」という地名について古歌を提示するということからも、まだ、ここでは景としての「布勢の水海」ということは歌の表現にはなかったといえるのではないだろうか。さらにこの歌群の最後の歌で福麻呂は季節にふさわしい景として、咲く藤の花、鳴くほととぎすという都で詠われているこの時期にふさわしい景を持ち出しているのである。藤とほととぎすこそがこの時期の美しい景とすることは、都の官人たちに共通した季節観に他ならない。都の官人である福麻呂は、家持が勧める景観への期待感として詠う景を都の景という共通認識で示したといえよう。

家持はこのような福麻呂の五首に和して詠うが、福麻呂の五首目の都で感じ取ることのできるこの時期の景物である「藤波」と「ほととぎす」をうけている。都から訪れた官人にとってこの季節の美しい景は「藤波」と「ほととぎす」を感じ取ることができるからこそ讃美の対象となるという共通認識がここにある。だからこそ、「藤波にけだし来鳴かず散らしてむかも」とそれが完全ではないことの懸念を「和へ」として表現しなければならなかったのであろう。

こうした景の表現は「布勢の水海」へ行く途上の景である（3）においても同様に、途中の海の景を「海人の釣舟」をとらえて迎えに来て欲しいといういう福麻呂に対して、舟がいる沖からよせる「波」を序詞に使い相手への気持ちを伝えるという表現となる。これは、新たに目に入る景を表現するのではなく、都の官人の意識する海辺の景にほかならず、途上といってもそこには、「布勢の水海」へと続く新たな景はないといってよい。

では、実際に「布勢の水海」へと行った（4）の歌群はどのように表現されるのだろうか。この時に今まで使われなかった地名が詠われることは注目すべきであろう。「垂姫」とまず、福麻呂が歌い出すことで、この歌は布勢の水海にいるということが明らかになる。これから詠うのは「布勢の水海」であるということがこの歌によって明らかにされたといっとてよい。そして、招かれた福麻呂は（1）において家持が期待させた飽きない景という言葉をそのまま使ってみせる。家持の言葉がそのまま感じとれたことへの謝辞でもある。その次に詠う遊行女婦土師は同じく「垂姫」という地名を詠い、今、「布勢の水海」の浦にいることを表現する。それを「言ひ継ぎにせむ」とすることで、都へこの景を愛でる宴が伝わることを願うが、それは先にこの地に至る前の（2）の福麻呂の歌同様、都の官人を意識しているといえよう。続く家持の歌は現地の地名の「垂姫」を詠いつつ、「奈良の我家」を持ち出す。都の家とはいうまでもなく妻がいる場である。旅先において、その地の景を讃美すると同時に、望郷歌を歌うことで、本来帰るべき都の家が明らかになり、旅先と家という構図が明らかになるが、これは、官人たちの旅先の歌のパターンといってよい。家持はここであえて、官人としての意識を強く出すことで福麻呂を含む都の官人のとの共通認識を示したといってよいであろう。吉村誠氏はこの歌に望郷の強さが述べられている点について「羈旅という概念の中で発想されている姿」を認めることができるとされる。[16]このように旅先という

意識を強く打ち出すことこそが、迎えた都の官人福麻呂と同じ歌世界を作り上げることになることを理解した表現とみてとりたい。この歌が、「布勢の水海」から一同の気持ちを遠ざけるのではないことは、招かれた福麻呂が再び飽きない景と詠うことでも明らかである。それを示すように福麻呂は「乎布の浦」と新たな地名を詠っている。このように地名を詠うことは、今いる場が都とは異なった土地であることを確認することになる。しかし、そこで景に新たな表現を用いるのではなく「見れど飽かずけり」として、都の景を讃美する時と同じ褒め方をすることで、家持の勧めた遊覧は都の官人としての福麻呂にとって満足するものとなったと考えられるであろう。

次に家持のもとにいる「掾」久米朝臣広縄はこの宴にふさわしい景物として「ほととぎす」を詠う。ほととぎすは越中においても初夏にふさわしい鳥として家持に多く詠われている。ここでも都と同様に季節を感じとる鳥として詠われたものであろう。そして最後には家持が詠う。家持はここで、都と同じ季節観を感じさせる鳥が鳴く場所を「多祜の崎」という地名をあげて詠うが、今、都と同じように季節を感じとろうとしている場所こそが、家持が福麻呂に勧めた景観となり、「布勢の水海」の景観は都の景観との共通認識となっていく。都から訪れた福麻呂を接待する景は、地名によってその場を明らかにしつつ、表現上では都と重なることで、より強く讃美の対象となったものといってよいだろう。

三

第三の歌群であるC群は天平勝宝二年のものである。（5）の家持の長歌・反歌から考えていきたい。この歌では、A群で「賦」として詠われた天平十九年の歌と同様に「思ふどち」と歌い始められる。A群においては、同じ心情をもつものが「心遣らむ」として景観を求めてやって来たことが目的として歌われた。ここでは、目的を更に詳しく表現している。目的とは「木の暗の　しげき思ひを　見明め　心遣らむ」ためであるという。A群（1）より詳しく記されるのは、その地を見ることが「木の暗の」ような胸に暗くつのる思いを晴らしてくれるということであり、この題詞からはすでに「布勢の水海」という景がこの地の官人たちにとって特別なものであるということを示していよう。そこでの様子は「小舟」で漕ぎまわることはA群と同じである。しかしながらA群の歌と異なっているのは、「布勢の水海」を取り巻く景を具体的に詠っていることであろう。「乎布の浦」には霞がたなびき、「垂姫」には藤波が咲いているというのである。藤はB群の歌でも詠われたものの、そこでは、都から訪れた福麻呂を接待する宴において「布勢の水海」に行く前に季節の景として詠われたものであり、布勢の水海の景そのものではないことを確認しておきたい。家持たち官人の心を慰める景として今、藤波が詠われているのである。[17]

それに続く語句の白波は景観ではなく序詞として都恋しさへと続くが、歌における視線は舟の上から浜へとむけられており、布勢の水海を景としてとらえているといってよいであろう。その後の表現は、景の素晴らしさを春秋という美しい季節を象徴する言葉で表現している。現在は霞と藤ではあるが、この「布勢の水海」はいつでも美しい景を見せてくれる場であることがこの歌から明らかになるのである。家持はこのC群の歌によって「布勢の水海」の景そのものを意識して詠ったのである。それは反歌でも表現されている。反歌では長歌で詠われた景のなかで、家持が今見ている「藤波の花の盛り」をとりあげている。家持にとって「布勢の水海」はどの季節においても官人としての愁いをいやすものではあるが、今、この季節に心惹かれるのは藤波であることに他ならない。こうして家持にとって「布勢の水海」の景として藤波が意識されたといってよいであろう。このとらえかたはC群の（6）へと受け継がれていくものと思われる。

C群の（6）がそれまでの歌群と大きく異なっているのは、題詞に「藤の花を望みみて各懐を述べて」とあることであろう。ここではまた、同席している人物に注目すべきである。守大伴宿祢家持、次官内蔵忌寸縄麻呂、判官久米朝臣広縄、久米朝臣継麻呂というメンバーである。久米朝臣継麻呂は官職は明らかではないが、判官久米朝臣広縄の関係者とみるのが一般である。[18]このメンバーは越中という地に都からやって来て、今この地にいる官人というように、立場、環境を同じくしているといってよい。官人であっても、B群の福麻呂のように、都の官人として越中を訪れている者とは異なった状況にいるメンバーといってよいはずである。越中という場に存在している者、言い換えれば越中の景を日常的に見ている者によって四首は詠われる。題詞にあるように今、「多祜の湾に船泊りして」一同は「布勢の水海」へと目をむけているが、そこで選ばれた景が水辺に咲く藤の花であった。

まず家持は藤波を水海に映っているものとして詠う。[19]家持は藤波を通して水海そのものをも詠おうとしているのである。藤波が美しいこと、それが水に映っていることから視点は水面へとむけられるが、その先にあるのは、沈んでいる石をも玉のように見せるほどに清らかな水であった。かつて、この地を訪れた福麻呂は石を家へのみやげとしたいと詠ったが、家持は玉のように見える物としている。これは家持が作り上げた「布勢の水海」の景と考えてよいであろう。続く内蔵忌寸縄麻呂は、家持の詠う水に映った藤を更に「底さへにほふ」とし、藤の美しさを清らかな水の色と関わらせて詠っている。家持は藤波を映す水が清らかなので石をも玉にすると詠うが、内蔵忌寸縄麻呂はあくまで藤波を使い、水海が美しく輝いているというのである。家持の視点を引き継ぎながら、新たな水の景を詠っているといえよう。さらに内蔵忌寸縄麻呂はその藤波をもう一度地上に戻し、「かざす」としている。この表現は都の宴で用いられるものであり、内蔵忌寸縄麻呂は都の宴を共通認識としている。そして、その美しい藤をまだこの景を「見ぬ人」に見せたいという。題詞の「藤の花」はここで、都と越中をつなぐものになったといってよいのではないだろうか。

三首目の久米朝臣広縄は「咲ける藤見て一夜経ぬべし」とし、藤波に心惹かれたため、わずかばかり滞在のつもりが一夜過ごしたという褒め方をする。ここでは、二首目の内蔵忌寸縄麻呂が地上に咲く姿として詠ったことを受けて、その藤波の姿は一同の心をとらえ離さなかった花としている。それ故、一同はこの「布勢の水海」に咲く藤波を見て去りがたいのである。ここでは藤波が美しい場所としての「布勢の水海」が詠われているのである。このように歌い継がれた時、藤波は「布勢の水海」の景観の美しさを象徴しているといってよいのではないだろうか。この三首目の歌では、藤波を通して官人たちの心をとらえた景を詠い、その前に詠われた藤波を改めてとらえなおすものと考えよいだろう。最後の四首目の作者は先に記したように経歴が明らかではないが、このような歌の配列を考える限り、歌表現について家持と同じ認識をもつ人物と考えてよいものと思われる。ここでは藤波は旅先の「仮廬」に挿す風流な物となっている。[20]景としての藤波は、この歌で都の風流なものを形作るものと変わるのであった。浦をめぐっているこのような都風の風流な自分たちを、「海人」と見るだろうかと詠うが、[21]見るのはこの土地の人であり、その視線をむける人と今、藤波を風流なものとして感じている自分たちとは異なっていることが明らかである。

こうして都の官人として、歌世界に共通認識をもつメンバーによって、家持の「藤の花を望み見、各懐を述べて」作るという目的は成し遂げられたのである。このC群（6）において「遊覧」は美しい藤波がある「布勢の水海」へ行くことであった。このようなメンバーで詠いつぐことで、家持は藤波を通して「布勢の水海」を多面的にとらえることができた。それは水海の景を歌表現として発見したということができよう。

おわりに

越中守として赴任した家持は、越中の景としては「布勢の水海」を数多く詠っている。都にはない景として家持が心惹かれたことはいうまでもないが、目に映った景を家持はその目的にふさわしい景として歌の世界に作り上げたのである。そこには、都での歌世界の共通認識があることが前提であるが、家持はそれをも基としながらも、都にはない景を表現することを試みようとしたのである。目的によって異なった表現は、家持が景を歌世界でどのようにとらえるかという意識と関わっているものであろう。都から遠い越中という地において、家持は都との差異をとらえつつも、決してその景を鄙として都から切り離すことはなかったのである。物理的遠いに鄙であったとしても、家持によって「布勢の水海」は都の歌世界の延長線上の景として歌世界に存在したといってよいのではないだろうか。

注

1　この歌数については従来さまざまな見解があり、定説をみない。

2　万葉集における、遊覧とは、小尾郊一氏が漢詩「遊覧詩」の影響をうけており、「広く言って自然の環境に遊ぶ詩である」とされるが、万葉集においては自然の景物を楽しむとするのが一般である。小尾郊一氏「中国文学に現れた自然と自然観」岩波書店　昭和三七年

3　針原孝之氏は、中国詩に学んだ「賦」の意識により、守として天皇の命令のまま統治する遠の朝廷の場として天皇の代行者ととして政治を行ためにに王権の讃美をするために詠んだとされる。「越中三賦」『家持歌の形成と創造』おうふう　二〇〇四年

4　花井しおり氏はこの歌群の前の家持邸での宴席歌（十八―四〇三二～四〇三五）、さらに「布勢の水海」に行った後の久米広綱邸での宴席歌（十八―四〇五二～四〇五五）を「福麻呂を饗す歌」としてとらえられ、それらの宴において「ほととぎす」が主題とされる。そして福麻呂について旧体制的な趣の歌人であったために、この宴で家持の歌の方法を理解し学ぼうとする機会であったと論じられる。「福麻呂を饗す歌」『セミナー万葉の歌人と作品　大伴家持（一）』第八巻　和泉書院　二〇〇二年

5　家持が越中に下向する時に次のように詠っている。

天離る　鄙治めにと　大君の　任のまにまに　出でて来し（以下略）
十七―三九五七

大君の　任けのまにまに　ますらをの　心振り起こし　あしひきの
山坂越えて　天離る　鄙に下り来（以下略）　十七―三九六二

大君の　任けのまにまに　しなざかる　越を治めに　出でて来し
ますら我すら（以下略）　十七―三九六九

大君の　命恐み　あしひきの　山野障らず　天離る　鄙も治むる
ますらをや（以下略）　十七―三九七三

6　橋本達雄氏「越中守時代」『大伴家持』集英社　一九八四年

7　鴨君足人の歌は次の通りである。

鴨君足人香具山歌一首

天降りつく　天の香具山　霞立つ　春に至れば　松風に　池波立ち
て　桜花　木の暗茂に　沖辺には　鴨つま呼ばひ　辺つへに　あぢ
むら騒き　ももしきの　大宮人の　まかり出て　遊ぶ舟には　楫棹
も　なくてさぶしも　漕ぐ人なしに　三―二五七

8　島田修三氏「布勢水海遊覧の賦」『セミナー万葉の歌人と作品　大伴家持（一）』第八巻　和泉書院　二〇〇二年

9　平舘英子氏「布勢水海遊覧作歌」　セミナー万葉の歌人と作品　大伴家持（二）』第九巻　和泉書院　二〇〇三年

10　島田氏　注8に同じ

11　杉浦一雄氏はこの「思うふどち」に注目され、家持関係の「布勢の水海」に四例みられることから家持が「都を離れ、鄙にあるという疎外感から逃れるために、雅を解する友を求め」て「連帯感を切望する」心情がかかわると指摘される「布勢水海遊覧歌群―大伴家持と『思ふどち』『国学院大学大学院文学研究科論集』第十三号昭和六一年三月」。杉浦氏の指摘は正鵠を得ているとは思えるものの、家持の「布勢の水海」に関するすべての歌群にこの語句が使われているわけではない。やはりこの語句が使われている歌群の特徴としてとらえるべきではないだろうか。

12　平舘氏　注9に同じ

13　越中三賦とされるものは天平十八年に下向後、翌年十九年に作られている。

14　花井しおり氏は遊覧の前日、さらに翌日の宴の歌から「福麻呂と家持たちはお互いの歌およびその方法を意識する」とされる。注3に同じ

15　この歌における「園」について和田徳一氏は「園」という地に早くいきたいとする。「『梅の花咲き散る園』私考」『万葉』第七号（昭和二十八年四月）、また、伊藤博氏は古歌から考え古歌について述べた佐佐木信綱氏『万葉集評釈』の評で「懐かしい人の音信を待ちながら、春風に梅の花の散る里に歩を運んでいくのである」をうけて「心はずませながらのどやかに『梅の咲き散る園』ともいうべき『布勢の浦』に参りたいといった気持ちを示すもの」としてこの一首を古歌として活用したと説明する（『萬葉集釋注　九』のこの歌の釈文　集英社　一九九八）、また花井氏はこの歌の「行く」と「待つ」という表現が並列的であることから水海へ行く期待と都の人の待つ期待を承けている表現とされる。（注3に同じ）

16　吉村誠氏　ますらをとしての意識　越中をとりまくもの羇旅歌としての意識
「越中の作品の特徴」『大伴家持と奈良朝和歌』おうふう　二〇〇一年

17　菊池威雄氏は歌の主題である「藤波」についてその生命力から藤の呪力から「藤の信仰に関わることがあったかもしれない」とされる。注15に同じ
平舘英子氏は『出雲国風土記』、『応神記』の例をひき藤の花の神聖をとらえた上で、水には異郷という意味があることを説話からとらえ「日常の世界から非日常の世界へとむかう」ものがこの歌群であるとされる。「藤花映水」『説話論集　六』清文堂出版　一九九七年

18　久米朝臣継麻呂は万葉集中にこの一首のみを残す。『萬葉集釋注』のこの歌の注では「広縄の家族の者か」とし、その根拠として大伴旅人が大宰府に家持を伴ったり、遣新羅大使阿部継麻呂が新羅に次男を伴った例をあげる。（『萬葉集釋注　十』集英社一九九八年）

19　菊池威雄氏は家持の「御言持ちとしての大義という観点」により「越中の花を歌うことは越中を王権の輝きの中に定位させること」とされ「藤波・水・石それらが玲瓏と韻きあいながら美的世界を構築している歌で、根底には皇権によって輝く食す国の景の讃美という理念が流れている」と論じられる。「藤波の影―大伴家持の越中秀吟」『日本文学』五一号　二〇〇二年

20　伊藤博氏は「仮廬」は旅先などで一夜を過ごす仮小屋とした上で、「実際は、藤の花を屋根に挿したり、藤の花蔭に休んだりしたことをいうか」とされる。『萬葉集釋注　十』のこの歌の注　集英社一九九八年

21　都人が旅先で「海人」と見られると詠うことは、人麻呂によって「荒栲の藤江の浦に鱸釣る海人とか見らむ旅行く我を　三―二五二」と詠われてから、旅先での歌の類型となっている。

「万葉集」の表記は『新日本古典文学大系』（岩波書店）による。